

## 第一章 長いランチ休憩

仕事は山ほどあるが、別に今日中に納品するわけでは無い。納期はそれぞれ別々で、霧島さんは余裕をもって仕事を受ける事になっている。定食屋で腹ごしらえをした後、霧島さんから午後の仕事前にゆっくり休もうと言われた。

ペットボトルのお茶を飲みながら、ソファの対面に座り霧島さんの顔を見る。

ああ…子の顔凄く好き。この人のところで仕事をするようになって、半年経っても全然飽きない。彼はいろんな引き出しを持っていて、楽しい話を沢山してくれる。霧島さんは、デスクから持って来たタブレットをテーブルの上に置いた。

「これ見て」

タブレットに移ってるのは、今日送られてきた長尺動画のようだが、どうやらそこにエロっぽいシーンが混ざっていた。

動画編集をしていると、映しちやいけないところが映っちゃったり、シーンによつてはちよつとピンクだったりする。それをカットしたりイラストを重ねて隠したりする事もあるのだが、その作業をしていると、霧島さんだけじゃなく私も微妙な気持ちになったりする。

「うわあ…おっぱい映っちゃってますね。ていうかスカートの短すぎて、チラチラと下着も見えているみたいですよ」

「そうなんだよ。午前中から、こんなもん見せられる方の気持ちにもなってもらいたいよなあ」

「この女の人も、色気むんむんですねえ」

「だよな。ちょこちょこパンティとか映るからさあ、その辺りは全カットかどうかの指示をもらわなくちゃ」

「ですね。チャンネルがバンになんかなっちゃったら、大変ですもんねえ。その辺も含みで、霧島さんに依頼して来るんでしょうけど」

「多少のエロは売りだろうから、どこまで出すかが微妙なところだ」

「乳首は完全NGですけどね」

結局、休憩と言いつつも仕事の話をしてしまっていた。

二人で動画を見ていると、だんだんとムラムラしてきちゃう。どうやら霧島さんも同じ気持ちになっているようで、じっと私を見つめる。

「ランチの時間延長しよっか？」

「えっ」

「ここにおいで」

そう言っただけで霧島さんは、自分の太ももをパンパン！と叩いた。

「はい」

私はテーブルを周って、彼のソファに座った。すると霧島さんはもう一度、自分の太ももをパンパン！と叩いた。

「おいで、にゃんこちゃん」

私は、お腹のあたりを霧島さんの太ももに乗せて腹ばいになる。そしてすると背中を擦った。

そう…霧島さんは私の事を、文字通り猫のように可愛がるつもりだ。

「可愛いな。お腹いっぱいになったか？」

「なった」

「あれ？ 返事はそれでいいの？」

「にゃん♡」

「よしよし」

そう言っで私の頭をなでなでしてくれる。彼のこの性癖を知ったのは、働いて三カ月ほどしたところだった。とにかく甘えられるのが好きみたいで、二人の時にすりすりしてたら猫みたいって言われ、それから事務所では猫みたいにすることを要求された。

でも…そんな性癖を知ってから、霧島さんが身近に感じるようになり、今では自分も霧島さんのやりたい事に応えている。

私は霧島さんの手に頬をすりすりして、まるで猫のように甘えた。仕事の事務所で何してるんだろうと思わなくもないが、夜に頑張ればいだけなので問題は無い。霧島さんの手が私の頭から背中を撫でつけて、本当に猫を撫でるようにする。

すりすりとはつぺたを撫でてくれたので、私は霧島さんの指をぺろりと舐めた。

「してほしいのか？」

「にゃーん♡」

人に見られたら凄く恥ずかしい事だけど、二人だとなぜか恥ずかしくなかった。

霧島さんの反対の手が、私の足をグイッとソファアーの上に持ち上げる。私は完全にソファアーの上に腹ばいに寝そべり、手摺に両肘を乗せて体を霧島さんに預けた。

さすさす。

「んっ」

「お尻が気持ちいいのか？」

「う、うん」

「ふふ」

するりとスカートの中に手を入れて、パンストの上からお尻を撫でられた。

「ランチタイムに甘えちゃう猫ちゃん」

「にゃん♡」

「よしよし」

丁度腹ばいになった腰の下に、霧島さんの太ももがあつてお尻が盛り上がっている。その盛り上がったお尻を、ゆっくりと撫でまわした。

「美羽は華奢だけど、お尻はちゃんと丸いよな」

「にゃー♡」

お尻を撫でまわしている手が、そっと私の股間に降りていった。

ん……

パンストの上からおまんこを撫でられ、からだがびくんとした。

ここに来てからは、仕事とプライベートの境目が無くなった気がする。黙って仕事をしている時もあれば、こうしていちやいちやる事もある。そのこともあって、仕事に対するストレスが全くと言っていいほどなかった。好きな時に仕事をして、好きな人との楽しい時間も過ごせちゃう。

前職の地方中小企業での仕事から考えると、本当に緩くて毎日の出社に苦痛が無かった。

「美羽のここ、熱い」

「にゃん？」

「可愛がつてあげないとな？」

「にゃーん♡」

はらりとスカートをまくり上げられた。そして霧島さんは、私のパンストとパンティーの腰ゴムに手をかけて、同時に膝のあたりまでずり下げる。私は、裸のお尻を曝け出した。

「は、恥ずかしい……」

「美羽はこうされるのは嫌いか？」

「……嫌いじゃない」

「よし」

霧島さんは裸のお尻を撫でまわし、お尻のほっぺにキスをした。

ぞくつ。

栗立ってくる。

「鳥肌立ってるね」

「うん」

すると霧島さんの指が、また私の股間に降りていった。

くちゅつ。

「あー、もうこんなにぬるぬるになってるんだ。期待しちゃってるのかな？」

「恥ずかしい」

霧島さんの指は小陰唇の間を上下になぞり、そのたびに私の背筋にぞくぞくとした快感が走った。仕事なのに、お尻をむき出しにして、社長から好き勝手におまんこを触られている。霧島さんの手は私のいいところを覚えていて、ゆっくりと確実に刺激して来た。

「うあ」